

台北二人旅

1日目

2002年12月31日午前11時台北空港に到着。

いつもの様に素早くバゲッジカウンターでスーツケースを受け取り、ガイドさんの待つラウンジへ出る。ツアーガイドさんもすぐに見つかり、「さあ、市内観光に出発だ！」と思いきや、このラウンジホールで3時間もの悲劇がまっていようとは、トホホ……………。

ガイドさんいわく、規則により1時間遅い便を待っていっしょに案内する…と。この規則は、どのツアーでも同じですと。えっ！俺たち20回くらい旅行行ってるけどこんなの初めてです。まいっか、旅は世につれ何とやら、楽しく行きましょう。とは言ってもなにせ3時間。あけみさん（俺の奥さん）と、ぶつぶつ……………。

そんなこんなでホテルにチェックイン出来たのは5時ごろ。荷物を整理して、まず明日に行く十分瀑布への列車の前売り指定席券を確保して、「さあ、晩ご飯でも食べに」と西門町へ出かけ、メインストリートからちょっと入ったところで「餃子」の看板が、目についた。「一条餃子采館」と言う名の店に入ってますが、ビールで乾杯！さあ、餃子、餃子。メニュー見ても俺たちの食べたい焼き餃子が見つからない、周りのお客さんたちのテーブルをみても誰も食べていない。得意の筆談で行きましょうと（焼き餃子）と書いてみたが、急がしそうな店員さんも女店主もチンプンカンプン仕方なく蒸し餃子と青菜いためとその他を注文してナントナク腹も七分目、さあ！街歩きでもしましょ。

西門の街は、台湾のハラジュクと呼ばれているだけに中々の賑わい、お店もヤングむけのセンス良い店がいっぱい。俺たちおじさん、おばさん、でも心ウキウキ、子供たちにお土産のスニーカーやら、孫のきぐるみパジャマやら、…………。屋台で買い食い、甘党の店と、お腹もいっぱい、おみやげもキャリーにいっぱい、時間も10時をまわっている事だしソロソロ帰りましょうか。第一日目終了また明日。 明天見！

2日目

今日は、十分瀑布に行く予定なので少し早めに朝食をとって準備を整え台北駅へ向かう。10時35分瑞方行き座席指定が、昨日買ってあるのでまずは安心。悠々と乗り込む。チケットを見ながら座席に行くと、なんとなんとかわいい女の子が、悠然と足をのばして座っています。「中国語でなんて言うんだっけ？」とっさに思い浮かばない。えい！英語で行け、「エクスキューズミー、マイシート？」チケットを見せる。彼女は「对不起」も「アイムソオリー」もなく黙って行った。まあメダタシメダタシ。この自強号で瑞方まで45分ほど、ちょっと車内観察日本人らしき乗客は、カップルが2組ほど日本のガイドブックをひろげている。俺たち夫婦とで6名位かな、あけみさんと今夜の予定やらを話しているうちに瑞方到着。平溪線に乗り換えです。ホームに下りるとホームの中に切符売り場と改札があり、すっごく合理的だなあ、と感心しながら切符を買って、となりのホームへ。今度は、ちょっと小さ目の電車に乗り込み、20分ほどで十分駅に到着。

ちいさな駅の低いホームには、自転車・オートバイ・荷車がダイレクトに入ってきてしまうやら、この駅から先の線路沿いの商店や民家は線路ギリギリに建っていて、電車が軒先を走っている。線路を跨いで反対側の細い路地の商店街のような（かな？）ところを通り過ぎると、広い歩道もついた観光道路に出て5分ほどで入り口に到着。入場料100円を払い「瀑布」まで、基隆河に沿って歩いたり、つり橋を渡ったりと、2、30分の山歩き、2つ目のつり橋に屋台があり、ここのてり焼き風味のフランクフルトソーセイジが、とても美味しかった。

瀑布の近くに来ると道も途絶えて線路の上を20メートルほど行くと、「ドウドウ」と重低音と、白い水煙、いよいよ目指す台湾のナイアガラ、「十分瀑布」です。高さ70メートル、幅90メートル、天然の台地から滝壺にむかってすさまじいしぶきと轟音をたてて流れおちています。中々の迫力でした。（本物のナイアガラの1/10くらいかな？）

滝の近くのレストランで軽い食事をとって十分瀑布を後にする。

駅に着いたが、電車の出発までに1時間以上も待ち時間があり、次々と帰って来る人も皆、手持ちぶ沙汰でブラブラ。俺たち二人は近くの食堂のおばさんが店先でラーメンを上手に作っているのを見ているうちに「美味しそうだね」と食べることに決定！3種類の麺があるので細めのビーフンと、平たいビーフンの麺を注文して席に着く。台湾の家族連れと相席になったので「ニーハオ、ツーシーチェンメン、ウオメンカンゴンシュウフンボウフ」と知っている中国語すべてをクッシして話し掛けると、なんと日本語で「中国語がおじょうじょうずですね」。敬語が使えるほどの日本語達人、わが故郷名古屋市に観光で行った事も

あるらしい。名古屋城の金鯱の話題になり「ちょうど俺が、小学校 4 年生の頃大阪の造幣局で作られた金鯱を名古屋城に運ぶときに市内を包装を解いて「金鯱パレード」したのを地元堀田通りで見学した名古屋城の金鯱の話でもりあがる。

煮卵や、はんぺんも、美味しいからと取ってくれたりしておまけに俺たちの分まで勘定済ませて出て行ってしまった。追いかけて出てお礼を言って、記念写真を撮らしてもらう。謝謝、再見！

そろそろ電車の来る頃なのでホームに行くと、もうたくさんの乗客が集まっている。基隆市の海洋大学の学生集団が、日本語会話の練習に日本人に話し掛けていて、俺たち二人にもあやしい日本語が話しかけられてくるが、質問は出来るが聞き取りが出来ないみたい。こちらまああやしい中国語で話すが、返事が理解できないお互い「アイドントノウ」。そうこうするうちに瑞方に到着、学生さん達とも再見！

一路、台北に向かう。列車の中での話題はもっぱら、今夜のご飯と夜遊びスケジュールどこへ行って何を飯を食べましょう。「華西街夜市に行ってみよう」で決まり！

華西街夜市は、龍山寺の門前の道路の歩道、車道、いっぱい利用した小さい店が、西の方に向って 500 メートル位ひしめいている「ワンダーランドバザール」。ひとごみと商品の間を縫うようにショッピングして歩くこれが夜市の醍醐味です。言葉は、あまりつうじなくても商品を指して「多少錢」と言えば OK、あとは値切りの交渉。付値の半分くらいから言ってみて、相手の表情を見ながら向こうの言い値と、こちらの言い値を近づけていってお互いの納得できる頃合が売値で、買値。この駆け引きがバザールの楽しさかな。交渉成立したらお兄ちゃん、おばちゃん達と、記念撮影も忘れずに「海外ネットワーク」造りに役立つかも。俺は帰国後いつも写真を送ったり手紙を出したりして、友達造りに利用してます。

お腹もいっぱい。おみやげも買えだし、地下鉄駅に向かっていると、占い師のアーケードの間にランプ屋さんが一軒あり、あけみさんがアロマランプが欲しいと再びショッピング。お気に入りのランプを 2 つばかり選んで値段交渉もおわり「多少錢？」。その時俺が、おじさんに、「百円の百は、中国語発音で何？」と質問したのが騒ぎの始まり。日本語のまったく分からない叔父さん、俺が商品をさらにマケロと言っているのと勘違いして少し日本語の分かる隣の「占い師のおねいさん」、その又隣の「おじさん」の 3 人で一生懸命に、「このランプは、この値段が一杯だから買ってやってくれ」と懇願してくる。俺は、得意の筆談で説明すると納得。5 人そろって大笑い。「百」の発音も教えてもらい、記念撮影して「再見」。2 日目も楽しく終了チャンチャン。

3日目

今日の予定は、故宮博物館へ陶磁器を見学に行くのとショッピング。ホテルで朝食をとって、地下鉄で「士林」まで行ってそこからタクシーで10分ほどで博物館に到着。朝10時なのにもう団体観光のバスが、かなりの数駐車している。入場料100元(350円)を払って入場。まずは二階へ陶磁器のコーナーへ。見たいのは、唐三彩、宋、明、清代の磁器、宋代の「灰青胆瓶」、西周晩期の「毛公胤」、明代の「五彩龍缶」。佐藤栄作元首相が所有していたもので、死後に寄贈された巨大な唐三彩「増長天王像」、等を見学して3階へ。宋代の「黄玉荷葉筆洗」、清代の皇帝や皇后が身につけた装身具類を見て、最後は一階の俺の大好きな考古学的発掘物の陳列、青銅器類が特に興味があるので、胤、(これは、祭礼などに使った)酒器、壺、銅鏡、銅銚、甲骨文字、興味はつきないが、あけみさんが、そろそろ退屈しだしそうなので、もう・お・し・ま・い。

館を出ると、もう12時を大きく回っている。士林の街へもどってランチタイムとしますか。食堂がアーケード状にならんでいるところがあったのでそのうちの一軒に入る。店先のメニューを見ているのだが魚料理らしいが、魚へんに緑ってどんな魚？ちょっと怖いけど注文してみる。あけみさんは、無難なところで豚肉料理を注文。どちらもセットになっていて、野菜もたっぷり。てんぷらも付け合わせについていた。さっきの怖い魚は、「めかじき」の様な魚の焼いたもので、中々の味。ビールは、隣の店で買ってきて御代は、75元(225円)也。まこと安い！

駅前のしゃれたカフェで、コーヒーを飲みながら午後のスケジュールの打ち合わせ。西門町へ出てブラブラしてみようか、敦化南路へ行ってみようか。結局どちらも行く事になり忠孝敦化へ向かう。ここでは、自分用のみやげをしこたま買って大荷物になってしまい、ひとまずホテルへ荷物を置きに帰る。

再び西門町へと出かける(しかし、俺たちもタフですよ)。ゆっくり買い物できるのも今日が、最後だから、西門の街の路地裏のほうまでじっくりとショッピングして回る。中々掘り出し物にめぐりあえずに、とりあえず晩ご飯にする。名古屋の「すがきや」のような店があったので入ってみる。女子学生と先生のようなグループは、大きな器でカキ氷の上にフルーツをトッピングしてココナツミルクをかけたものを3、4人でほうばっている。ちょっと美味しそうだけど、氷はやばいかな？日本のあんみつによく似た「蜜豆氷」と、「酸辛湯」を注文する。俺たちの他に注文の品を待っているお客もいないようなのに、20分位掛かってやっと出てくる。店員さん達ものんびりしゃべっている。こりゃだめだと、とっと店を出る。

向かい側の立ち食いラーメンの店〔阿宗麺線〕は、とてつもなく繁盛している店で、30人以上のお客が歩道にしゃがみこんでラーメンを食べている。こんな店のラーメンが食べて見たいとおもうけど、歩道の周りは食べ散らかしたラーメンの残りやら、スチロールの器が散乱していて、とてもこの場所では食べられません。

路地裏から路地裏へとくるくる廻って、おみやげもいっぱいになった事だしソロソロ帰りましょ。あれっ！ 駅がどっちの方向か分からない。近くいた女の子に「ウオ・スウ・チー・シイモンチェン・マア？」と尋ねたが、困った顔をされた。さっそくメモ用紙に「我想去西門駅馬？」と書いて見せると、即座に方向を指差して教えてくれた。やっぱり発音を練習しなくちゃ使いものにならないネ。三日目も無事終了。

4日目

いよいよこの旅も最後の一日になってしまった。

帰りの便は、夕方6時だからゆっくりできるはずなんだけど、ツアー旅行のガイドさんが午後1時30分には、ホテルへ迎えにやって来る。朝8時に起きて、早めの食事を済ませてしまい、室に戻って荷物をスーツケースに詰め込んで（超満タン）荷物すべてをロビーに下ろしてキーピング。チェックアウトも済ませて暇つぶしがてら晶華飯店の免税店へ出かける。9時オープンから入店したけど欲しい物もないしつまらないので、40分ほどで出かけてしまう。隣のルイヴィトンも11時にならないとオープンしない。そこへ現れた怪しいおじさん（曾森男）、「にせもの屋さん」です。台湾では取り締まりが厳しいのか、コピー商品は街中ではぜんぜん見かけなかったのに……。

私の店へ（コピーを）見に来てほしいとしきりと誘う。時間を持て余している事だし、「いよいよ」とふたつ返事。おじさん大喜びで名刺を見せたり、日本人の客からの手紙を見せたりと、怪しくないと言い訳に一生懸命。5分もしないくらいで古いビルに着いた。エレベーターで二階に上がると、頑丈そうな鉄のとびらがあり、インターホンでおじさんが何か言う。「ギーッ」と扉が開いて中に入った。おじさんと一緒にいた目つきの鋭い見張りのお兄さんは、又もや一階エレベーター乗り場で見張り役。おじさんに、「当局の取り締まりがよほど厳しいの？」と訊ねると、「警察は、賄賂を出しているから大丈夫」と。それよりもヤクザが来るのが怖いらしい。30畳位の部屋の中はコピー商品でビッシリ。おじさんの娘さんと称する女の人が、一人店番をしていた。こちらも時間を持て余しているので、ゆっくりとお茶をご馳走になり、コピー事情やらうんちくを楽しく聞かせてもらう。このまま帰るのもチョット気が引けるので、お愛想に「煙草入れ」と、「財布」と、「キーホルダー」

と、「手帳」の4点を買う。おじさん中々の商売上手で、おまけにと小さなキーホルダーを3個もくれた。暇つぶしも出来た事だしそろそろおいとまして帰る。

近くのグッチ直営店をのぞいたりして、残り時間も後2時間を切っている。俺たちの宿泊していたホテルの地階のフードコートへ戻り、軽い昼食をとって一階ロビーでセーフティーボックスをキャンセル。ガイドさんの登場を待つ。

お迎えバスでもう一組の家族連れをひろって、後は「おきまり」のおみやげ屋さんめぐりのコース。全て終了して空港にとどけてもらう。そこでなんと、またあの「怪しいおじさん」曾さんと会う。曾さんは、大口商品購入のお客さんのポーターサービスで空港まで来たらしい。再会を約して再見。

楽しかった台湾の旅も全て終了。又来まーす！